

# Who Is Yusaku KAMEKURA?

What Is This?

答えはこのページの  
下にあります

Q1



Hint これがあると明るいです

Q2



Hint ケータイではありません

Q3



Hint アルファベットにご注目

Q4



Hint 赤い丸と隠れた文字

その名を知らなくてもこれらのマークはきっとどこかで目にしたことがあるはず。これらのマークたち、そしておなじみ当館のマークをデザインしたのが、旧・吉田町出身の亀倉雄策(1915-1997)です。まだ「グラフィックデザイナー」という言葉が一般的でない時代にデザインに目覚め、昭和を代表する印象的な作品群を残しました。東京オリンピックや大阪万博のポスター、ヒロシマアピールズの燃えながら落ちてゆく蝶のポスターなど、戦後国際社会に羽ばたこうとする日本のイメージは、いつも亀倉のデザインとともにあったと言っても過言ではありません。

故郷の吉田を離れ14歳のときに東京でフランスのデザイナー、A.M.カッサンドルのポスターを目にしてから、ドイツのバウハウスやロシア構成主義のデザインに憧れ、初めて装丁を手がけたのが19歳。少年時代から亀倉ははっきりと職業としてデザイナーを目指していました。それまで「図案」と呼ばれていたものを誇りをもって「デザイン」と呼んだのも彼が最初といえます。

のちに義兄弟とも呼ばれる仲になった一人、写真家の土門拳と知り合ったのはこの頃。土門の紹介で名取洋之助が設立した日本工房に入社し、理想的な環境でグラフィック誌「NIPPON」のデザインに関わりますが、日本は次第に軍事色を強めていきました。やっと印刷にこぎつけた軍用の仕事を空襲で焼かれたこともあります。戦争を生き延びた亀倉の目に、進駐軍のスナックの鮮やかな青いパッケージが焼き付きました。

1954年、亀倉は生まれて初めてアメリカに渡ります。憧れ続けた欧米デザインの最新事情を知るために、ところがニューヨークであるデザイナーに作品を見せたとき、亀倉は次の言葉にショックを受けました。「なぜ浮世絵のような伝統的なデザインをしないのか」。彼はその後二度とアメリカ人デザイナーに作品を見せたことはありません。

帰国後に著した「世界のトレードマーク」という本は、その問いに対する亀倉の一つの答えでした。「コンパスと定規だけの計算で作ることができる紋章を、あたらしい日本の産業形態に

マッチさせることがどうしてできないのだろうか」一亀倉が生み出した無駄のない美しいロゴマークの数々には、実は戦前から関心を寄せていた、日本の伝統的な家紋の影響を見ることができます。そして1961年、金色の五輪の上に真っ赤な太陽が輝く、あの東京オリンピックのポスターが誕生しました。それは日本から世界のカメラが生まれた瞬間でもあったのです。

(主任学芸員 荒井直美)



TOKYO 1964

亀倉雄策《東京オリンピックシンボルマーク》1961年

「古くても新しくてもいいものはいい。デザインの本道でも、脇道でも、路地でもいい。有名も無名もない。」—亀倉雄策  
その功績を讃えて創設された亀倉雄策賞。亀倉雄策のあとに続く、時代を担うクリエイター、その歴代受賞作が一堂に!

時代を駆けるデザイン 亀倉雄策賞の作家たち 2012年4月27日(金) ▶ 6月3日(日)

# 吉原悠博氏 インタビュー

吉原さんに当展覧会に出品される二つの作品《新川史眼》《さくら》についてお話を伺いました。

Q.《新川史眼》が最初に発表されたのは「うちのDEアート」<sup>※</sup>でした。制作時のエピソードなどを教えてください。

——《新川史眼》を最初に発表したのは第3回「うちのDEアート」です。実を言うと、昔からの友人である新潟大学の丹治嘉彦先生から、第1回目の参加から誘われていました。しかし、そのころの自分には、「町おこし」をテーマとする「うちのDEアート」の参加に快諾できなかった。なぜなら、自分の生まれ故郷である新発田の町おこしもしていない、ましてや実家である写真館を継いでないのに、参加する資格はないと思ったのです。同じように「町おこし」をテーマとする大地の芸術祭がありますが、良い作品が展示されただけでなく、過疎地域の活性化のための色々なトライアルをしているようですが…。

やはり、大きな問題としては、若い人が東京や都会に出て行ってしまっ、お年寄りしかいなくなってしまう、家を継がなくなったりという問題が重い。海外で美術作家の仲間会ったり、彼らの作品を見たりすると、自分の国のアイデンティティーとか自分の街とか先祖とかが明確にある。自分は新発田にも帰らず、家の仕事も継いでいない、そんな自分によその街の文化を掘り起こすことはできないとも思ったからです。「うちのDEアート」に参加する気になったのは、新発田に帰り写真館を継ぎ、新発田の町おこしを積極的に始めたからなんです。

といってもすんなり進んだわけではなく、実は、新発田の写真館を廃業する準備も進めていました。しかし、廃業する前にと、先代の残した膨大な写真を、じっくり見てしまった。とても、その写真を捨てることはできないと思ったのです。その後、かなり悩みましたね、本当に。結局、この膨大な写真を、せめて映像作品にでもしようとするに至ったのです。それで《SPIRAL LIFE: 吉原家の130年》<sup>※</sup>を作り、美術館でもギャラリーでもなく、新発田の地域交流センターというところで、発表したんです。そうしたら、いままでにない独特の反響があった。観客は、地元のおじいちゃんやおばあちゃんたち、近所の人やら同級生やら…。それで、吉原写真館のことや、祖父、祖母のこと、昔の新発田のことを懐かしそうに語るのです。これには、本当に自分自身がびっくりしました。ただ、この体験は、自分がしばらくの間、悩み苦しんでいたアートとは何かという答えが潜んでいるという気がしたというか、何かに目覚めた感じがありましたね。

その後、さらに先祖について調べるうちにいろんなことがわかってきた。例えば大河津分水工事に関わっていたこと、それも三代に渡って。さらにその記念碑が中之島にあたりとか、そういうことが重なって、たまらない気持ちになり川の作品を作り始めたんです。それまで川っていうのは雨水がたまって、こう海に流れていくもんだと思っていたんですけど、

※「うちのDEアート」…2001年より隔年で、新潟市西区内野町を中心に行われているアートプロジェクト。新潟市の政令指定都市化に伴い2007年より「西区DEアート」と改称。2011年より原点回歸し「うちのDEアート」として実施。

※《SPIRAL LIFE: 吉原家の130年》…長い歴史を持つ吉原写真館に保存されてきた、貴重な写真の數々を吉原氏のディレクションにより映像化した作品。

《新川史眼》2007/2012年

## とびまわる学芸員①

### GUN展準備中 雪の中の学芸員

近代美術館では今年の11月から「GUN—新潟に前衛があった頃」という展覧会を開催するのですが、その事前調査のために、グループGUNのメンバーだった堀川紀夫さんと前山忠さんの自宅とアトリエがある上越市まで、特急北越に乗って大雪の中出かけました。展覧会の打ち合わせや作品所在調査は順調に終わったのですが、前も後ろも雪、雪、雪！前山

さんのお宅では、敷地内の蔵に入ろうとして足を踏み外して3メートルの積雪の中にはまってしまい、前山さんに助けていただきました。GUNは「雪のイメージをかえるイベント」によって世界的に有名になりましたので、作品世界を理解するには絶好の環境でしたけど。

(万代島美術館主任学芸員 高晟峻)

※前近代美術館主任学芸員



特急北越でいざ出発!



前山さんのご自宅にて

Yukihiro Yoshihara

吉原 悠博

(よしはら ゆきひろ)

1960年新潟県新潟市生まれ。美術家。東京芸術大学在学中の1982年よりニューヨークに留学。帰国後は神奈川を拠点に本格的に作家活動を開始。光や音が鑑賞者を圧倒する巨大なインスタレーションを発表していった。2003年から郷里新潟田に拠点を移し、一転して自らの家系や地域、風土といった主題を身近に求めた映像作品を発表している。140年もの歴史のある吉原写真館の現館主でもある。



そんな単純ではなくて…。ほとんどの川は掘削されたり分水されたり、それぞれ役割も違う。川の水面は、状態によって水が止まっていたり淀んでたりとか、あるいは海から逆に遡っていったりとか、それをポンプが急に音が出て掻き始めるとか、それらがすべて連動していることが写真を撮っていると、初めてわかりました。まあ、川というか水路というか、人工的に作られていたのですね。そして、それは何のためかという、イコール生きるため、リアリズムというか、生きること、食べること、つまりその土地を開拓して、江戸時代だったら天領だったものを、それを開拓することによって地主になれたという史実やら、そのリアリズムと創造力というか、本当にびっくりしました。川の歴史を知るにつれ、新潟の成り立ちというのを知って、ショックというか感動したんですけども、これを作品にしたいと考えるようになった。

《SPIRAL LIFE: 吉原家の130年》は自分の作品と言えるのかしら? 作品を意識して撮ったものは1枚もありませんね。この映像の編集には、2年ほど時間がかかっていますが、自分の父親や祖父や曾祖父の写真の中から感じ取ったものがあって、僕自身もやっぱり、作品として撮るべきだと思ったんですよ。その時に丹治先生に、三度目になるのですが、ありがたいことに声をかけられた。内野で発表するということもあったので「新川」を題材にしたんです。とても思い出深い作品です。

**Q. 《さくら》はどのようなコンセプトで制作された作品ですか?**

——無常観というかね。実をいうと吉原家の特集をした『風の旅人』が出版されて1週間くらいで、親父が亡くなったんですよ。1ヶ月後に一緒に史実を調べてた相棒だった金弥おじさんという僕のおじさんがいるんですよ。その方も亡くなった。そのおじさんが亡くなった日は僕の誕生日なんですよ。その次の月にはおばさんも亡くなったんです。3ヶ月の間に親父の兄弟3人亡くなって…なんていうんですかね、肉親の死を連続して体験して、なんというか、見え方、考え方にかなり影響を受けましたね。ただ、亡くなった後も、まだ一緒にいる気がしてて、いまでも不思議な感覚が続いています。そう、見ている風景が、本当に違って見えて来ている。ある意味、冷めたまま、じっくりと観察できるようになった。目を通して展開する世界が、自分の頭の中で、幾何学的に気持ち良く回転しているような…。

この映像に関しては、まだ未整理の部分も多いのですが、もしかすると、「無常観」という感覚って、こんな感じなのかなとか思いながら、撮影し、編集をしました。公では、あまり発表してないので、楽しみにしていますね。

**数時間あまり熱く語られた吉原さん。展覧会が楽しみです。ありがとうございました。**

(聞き手: 学芸課長 藤田裕彦)



(3/2) 2009.12年

とびまわる学芸員! ②

## 作家調査でアメリカへ!

昨年11月に新潟出身のビデオ・アーティスト久保田成子の調査で渡米しました。彼女のアトリエはニューヨークで最も人気のある地区の一つ、ソーホーにあります。ソーホーは1960年代から貧しい芸術家やデザイナーが安い賃料と広いアトリエを求めて移り住み、次第にオシャレな街へと変貌しました。彼女の住んでいる建物も、フルクサスの創始者であるジョージ・マチューナス

が貧しい芸術家たちに住まいを提供し、いわゆる芸術家村をつくろうと、廃業した工場を買い取って改装したビルです。公私のパートナーであったナムジュン・パイク(2006年逝去)と長年暮らしたアトリエは、二人の思い出であふれていました。

(新潟市美術館学芸係長 濱田真由美)  
※現在当館より新潟市美術館に向向中



パイクの思い出が詰まったアトリエの一角



二人のエディティングルーム

う〜む。このタイトルで書いてくれと頼まれたはいいが、色々ありすぎて困ってしまいますねえ。概説書ならマイケル・サリバンの『中国美術史』(新潮社、1973年)みたいな本がありますが、知識まっさらな状態でこういう概説書を読んでも全く頭に入らないことは保証します。むしろ、テーマを絞って分野や時代別に読んでみるといういかもかもしれませんね。例えば古い時代の絵画であれば、王耀庭さんの『中国絵画のみかた』(二玄社、1995年)が一番のオススメです。著者の王さんは台北の故宮博物院の学芸員で、来館者に解説するように分かりやすく書いてくれています。現代アート関係では、牧陽一さんの『中国現代アート』(講談社、2007年)や国立新美術館で開催した「アヴァンギャルド・チャイナ」展の図録がいいかもです。近代美術では、万代島美術館で「チャイナ・ドリームー中国美術の知られざる流れ」という展覧会をやりましたのでその図録をぜひ見ていただきたいですが、「知られている流れ」の方は、実は日本語で読める1冊モノの本はあまりなかったりします。ここはひとつ中国語を猛勉強して、李錡晋さんたちの『中国現代絵画史—民国之部』(上海:文匯出版社、2003年)あたりを辞書引きながら読んでみましょう。ではでは、再見!

(万代島美術館主任学芸員 高巖俊)  
※前近代美術館主任学芸員



中国美術・中国を楽しもう!  
こちらの展覧会をチェック

### 企画展

地上の天宮 北京・故宮博物院展  
2012年7月3日(火)~8月5日(日)

### コレクション展第2期

中国絵画と描かれた中国  
2012年6月28日(木)~9月2日(日)

## キンビのおすすすめ

雪国の人々を悩ませた雪もとけて、春へと様々な生命たちが活気づいてまいりました。

千秋が原ふるさとの森に調和した緑に囲まれた当館は、1993年に開館し新潟県の文化創造の核として県民と美術を結びつけ、憩いの場となることを願い造られました。

今回のキンビおすすすめは『エントランス』です。エントランスに入ると一階目に飛び込んでくるのが天井の逆ピラミッドです。ページュの大理石に覆われた神秘的な造りになっており、壮大なパワーを感じずにはいられません。また、コンクリートの冷たさの中にまるみがあるなどアンバランスですがマッチしている不思議な空間となっております。

当館へお越しの際は、エントランスを含め建物も美術のひとつとして鑑賞してみてください。

(囃託員 本多五月)



エントランスで上を見上げると...

## お世話になってますシリーズ

その1

白手

-しろて-



美術館スタッフは白手袋を短く略して、白手(しろて)と呼んでいます。

直接作品に触れると、手の脂が残り、カビやサビなどの原因になることがあります。また、展示室の可動壁を移動する場合も素手で触れると手垢の汚れが付着します。そのような場合は、綿製の白い手袋を付けて作業します。白手を付けたことによって滑りやすくなったり、指先の微妙な感覚が損なわれたり、作品を扱うのに支障が出る場合には使用しないこともあります。

(前学芸課長代理 野村宏毅)

## 編集後記

春は出会いと別れの季節——当館職員も万代島美術館へ、学校現場へと動きがありました。一方新しい職員のみなさんをお迎えして、雪椿通信編集部もちょこっとメンバーチェンジ。新たな気持ちの雪椿通信を、今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

さて、吉原悠博さんのインタビューいかがでしたでしょうか?8月には今年で5回目を迎える「こどもアートミュージアム」も開催(年間スケジュールの会期より変更となりました。正しくは8月17日(金)~23日(木)となります)。こどもの作品の展示や、楽しいワークショップもありますよにこちらも楽しみに。(美術学芸員 伊澤朋美)

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第38号

編集・発行

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART  
新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14  
TEL0258-28-4111代 FAX0258-28-4115  
http://www.lalanel.gr.jp/kinbi/ e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷  
発行日

株式会社 山田写真製版所 〒950-0064 新潟県新潟市東区松島1-5-14  
2012年4月25日